追手門学院大学地域創造学部紀要
2016年3月10日，第1号，65-91

ブラインドサッカーの魅力と課題
── 視覚障害プレーヤーの語りから ──

草 山 太 郎

Appeal of Blind Soccer and its Challenges
── Narratives of Player with Visual Impairments ──

Taro Kusayama

要　約

本稿では、ブラインドサッカーの視覚障害プレーヤーの語りをとおして、ブラインドサッカーの魅力を明らかにし、ブラインドサッカーの普及発展にとって必要な課題を考察する。ブラインドサッカーの視覚障害プレーヤーに対して、①ブラインドサッカーを始めたきっかけ、②ブラインドサッカー初体験時の感想、③ブラインドサッカーの魅力、④ブラインドサッカーの課題、を中心にインタビューを実施した。その語りから、ブラインドサッカーには「自由に動ける」「仲間とのつながり」だけでなく、「技術の深さ」「知的なスポーツ」という新たな魅力が発見された。また、ブラインドサッカーには「おもしろさ」とともに「怖さ」もあることがわかった。ブラインドサッカーの普及発展＝競技人口の拡充のためには、第１に、「技術の深さ」をもつ「知的なスポーツ」としてのブラインドサッカーの多くの魅力を伝えていくこと、第２に、安全対策を充実していくことが課題であることを示した。

キーワード：ブラインドサッカー、視覚障害プレーヤー、語り、魅力、課題

1. はじめに

「シャカシャカシャカ…」

音のするボールを股の下あたりに保持しながら、左右の足で交互にタッチするというドリブルで前に進むプレーヤー。

「ボイ！ボイ！ボイ！」

ドリブルで攻め込むプレーヤーを止めようと、声を発しながら近づく違うユニフォームのプレーヤー。ドリブルをしているプレーヤーはその声に反応して方向を変え、さらにドリブルを続ける。この２人はアイマスクで目を覆い、さらに、そのうちの１人は額のあたりに硬いスポンジで製作された環状のヘッドギアを装着している。

「はい、ゴールゴール！左右に２人…」

ドリブルをするプレーヤーが向かっているゴールの裏から、そのゴールの場所とゴール前の状況を示す声を発する人がいる。この人は、アイマスクとヘッドギアはつけていない。

「右！右！」

ドリブルで攻め上げってくるプレーヤーの情報を、ゴール前を守っている２人のプレーヤーにゴールキーパーが伝えている。ゴール裏から声を出している人と同じく、アイマスクとヘッドギアはしていない。

ディフェンスの２人をかわしながらシュートを打つ。しかし、ボールはキーパーにはじかれ、ゴール後方に転がっていく。シュートを外したことがわかると、そのプレーヤーはすぐにセンターライン近くまで戻っていった。

よく見ると、プレーヤーが走り回るフィールドのサイドライン上には、高さ約1メートルの壁が置かれている。

これは、近年、メディアでも取り上げられることの多くなってきたブラインドサッカーというスポーツの試合の描写である。

さて、本稿の目的は、ブラインドサッカーの視覚障害プレーヤー[(1)]（以降、「プレーヤー」と表記）の語りをとおして、ブラインドサッカーの魅力を明らかにするとともに、今後のブラインドサッカーの普及発展にとってどのような課題があるかを考察することにある。

そのために、まず、視覚障害者が競技者として参加できるスポーツについて概観した上で、ブラインドサッカーとはどのようなスポーツであるのかを確認する。その上で、プレーヤーがどのようにブラインドサッカーを経験しているのか、プレーヤーの語りをとおしてみてみたい。

なお、ブラインドサッカーには全盲のB1クラスと弱視のB2／3クラスがあるが、本稿で取り上げるのはB1クラスである。

2. 視覚障害者のスポーツ

視覚障害者が競技者として参加するスポーツにはどのような種類があり、どのように行われているのか、まず紹介しておこう。

ゴールボールという球技の紹介から始めてみたい。この競技は、スキーのゴーグルタイプのアイシェードを着用した１チーム３名のプレーヤー同士が、味方のゴールを防御しながら相手ゴールめがけてバスケットボールとほぼ同じ大きさの鈴入りボールを転がすように投げあう。コートはバレーボールと同じ広さである。第二次世界大戦で視覚に障害を受けた傷痍軍人のリハビリテーションプログラムの一つとして考案され、のちに民間にも拡がった。現在、国際パラリンピック委員会の加盟団体である国際視覚障害者スポーツ協会（ＩＢＳＡ：International Blind Sports Federation・以降、「ＩＢＳＡ」と表記）の公認競技となっており、視覚障害者の正式種目としてパラリンピック大会夏季大会の競技の一つとして行われている。

２つ目のグランドソフトボールも、視覚障害者のあいだではよく知られプレーされてきたスポーツである。この競技は、従来「盲人野球」の名称で親しまれていたが、1994 年にこの名称に変更された。全日本グランドソフトボール連盟のサイトでは、「グランドソフトボールは視覚障害者の野球です」と説明されている。競技は、４人以上の全盲者を含む１チーム 10 人で行われる。野球より１名多くなっているのは、左右両側に遊撃手が置かれるためである。投手はハンドボールと似たようなボールを投げ、野球のバットで打者が打つ。ゲームのスタイルは野球と同様である。なお、このグランドソフトボールのボールの中には、ゴールボールやブラインドサッカーなどのように音が出るものは入っていない。投手は全盲、捕手は弱視と決められており、捕手は手を叩くことで投手に投球コースの指示を送る。打者はボールが地面を滑る際の摩擦音や軽く弾みながら転がるバウンド音を手がかりに打撃をするため、とくに全盲選手が打者の場合はベンチは音を出してはいけない。プレー中に声による指示が認められているのは、全盲守備者に対する弱視守備者の声による方向指示のみとなっている。

３つ目として、サウンドテーブルテニスをみてみたい。この競技も 2004 年に名称が変更されている。以前は盲人卓球という名称であった。この競技は、金属球入りの卓球用ボールを、卓球台から 4.2㎝の空間をあけて貼られたネットの下を、ラバーの貼られていない卓球ラケットでころがし打ち得点を競い合う。ネットの役割が一般の卓球とは逆になっている点が特徴的である。競技時は視力による有利不利をなくすためアイマスクを着用する。ボールのなかに入れられた４つの鉛の球は転がると音がし、その位置や速度、向かっている先をプレーヤーが知るための情報を提供してくれる。

４つ目のブラインドテニスも盛んになりつつある。これは、全盲の武井実良氏が考案した日本発祥のスポーツである。ブラインドテニスでは、中に鈴の入ったスポンジボールが用いられ

る。視覚障害者が行う他の多くの球技とは異なり、地面や床を転がすのではなく、地上から高さ 80cm のネットの上を超えてくるボールを、弱視者は 2 バウンド、全盲者は 3 バウンドで打ち合う。この種目が始まった時は視覚ハンディキャップテニスと呼ばれており、1990 年には日本視覚ハンディキャップテニス協会が設立されている。2009 年に競技名が現行のブラインドテニスに変更されるとともに、協会も日本ブラインドテニス連盟と名称を改めた。イギリス、韓国、台湾、中国など世界各国でも普及活動が行われており、アジアブラインドテニス普及促進協議会は、2020 年までにパラリンピックの正式種目となるように働きかけを行っている。

５つ目のフロアバレーボールも広くプレーされている。この種目は全盲や弱視の視覚障害者と晴眼者が一緒にプレーできるように考案されている。基本的には６人制バレーボール競技規則を参考にしている。ネットは床上に 30cm の隙間ができるように張り、その下をバレーボールが通るようになっている。チームは前衛３名、後衛３名の計６名で構成されている。前衛の選手はアイマスクもしくはアイシェードを着用するので、晴眼者でも務めることができる。後衛の選手は弱視者もしくは晴眼者が見える状態でプレーする。視覚障害者向けに考案された球技の多くは使用球に音がするしかケガ施されているが、フロアバレーのボールは、色を白色とするという指定がなされているだけで音が出る仕掛けはない。そのため、グランドソフトボールと同様に全盲プレーヤーはボールが床面を滑る際の摩擦音や転がるバウンド音を手がかりに球を捕捉することとなる。

６つ目の盲人マラソンも人気のあるスポーツだ。盲人マラソンでは、弱視者で単独で走る事のできるランナーの場合を除いて伴走者（ガイドランナー）が必要である。伴走に関するルールは、大会ごとに詳細に定められている。たとえば、パラリンピックであれば、クラス 11（視力が光覚以下）の競技者は承認された不透明な眼鏡やマスクを着用しなくてはならない、クラス 11 の競技者はガイドとともに走らなければならない、800m 以上のレースでは、ガイドが、競技者の前方、1 歩以上先行すると失格となる「ガイドロープの使用は、任意」「競技者は、(腕をつかんだり、ロープを使う代わりに) ガイドから口頭での指示を受けてもよい」「フィニッシュでは、競技者が先にラインを越えなくてはならない。(同時は失格)」等の規定がある。盲人マラソンではガイドランナーの不足が恒常的にあり、東京では月に一度のペースでＮＰＯ法人日本盲人マラソン協会が伴走者育成研修会を開催している。

最後に、盲人柔道についてもふれておきたい。柔道は見えないことに対する配慮があまり必要ではないこともあり、昔から町の道場においても視覚障害者と晴眼者がいっしょに活動している。視覚障害者も晴眼者と同じように講道館で段位を取得し、競技も障害の程度によって分けることなく体重別で行われる。視覚障害者の試合が晴眼者の試合と異なるところは、両者がお互いに組んでから主審が「はじめ」の宣告をすること、試合中に両者が離れた時は主審が「まて」を宣告して試合開始位置に帰ること、場外規程は基本的に適用されないこと、という３点である。

その他にも、視覚障害者が参加できるスポーツはたくさんある。視覚障害者のスポーツを統括しているＩＢＳＡが主催して2015年にソウルで行われた第5回国際総合競技大会では、陸上競技、5人制サッカー（Ｂ１）、5人制サッカー（Ｂ２／３）、ゴールボール、柔道、パワーリフティング、ショウダウン、水泳、テンピンボーリング、チェスの10競技が実施された。その他、ＩＢＳＡ公認の種目としては、アルペンスキー、ノルディックスキー、アーチェリー、射撃、ナインピンボーリング、パワーリフティング、タンデム自転車などがある。

以上のように、視覚障害者が参加できるスポーツがたくさんある中で、筆者がブラインドサッカーを取り上げる理由は、他の視覚障害者のスポーツにはない魅力的な特徴があるにもかかわらず、日本ではほとんど学術的研究がなされておらず、一般の人々にもあまり知られていないという現状があるからである。そこで本稿では、ブラインドサッカーとはどのようなスポーツであるのか、その歴史や競技内容や特徴についての解説から始めることにする。

3. ブラインドサッカーとは

ブラインドサッカーは2004年からパラリンピックの公式種目になり、近年、日本のメディアでも取り上げられる機会の増えた注目の視覚障害者のスポーツである。本節では、まずブラインドサッカーの沿革について国内を中心に概観し、次に必要に応じて具体的なルールを紹介しつつ、この競技の特徴を記すこととする。

3-1 沿革

ブラインドサッカーは1980年代初頭に開発され、ヨーロッパ、南米を中心に広くプレーされてきた[(2)]。

では、日本における視覚障害者のサッカーはどのような歴史を持つのであろうか。まず、視覚障害者スポーツ指導のパイオニアである加藤博志によって1980年代に「盲人サッカー競技規則」が考案された。この盲人サッカーは、国立リハビリテーションセンターにおいてのみ行われていた。このゲームでは、全盲選手と弱視選手が手をつないでペアになる。そのペアがボールを得て「キャッチ」とコールすると、主審が笛を吹いてゲームを止める。そして、その位置から弱視選手の指示のもとに全盲選手がボールを蹴り、パスやシュートをするというルールであったという（岡田仁志 2009）。また、1985年には、千葉盲学校の寄宿舎にサッカーチーム「ペガサス」が誕生している（鳥飼新市 1994）。この加藤博志の試みとペガサスの実践はどちらも興味深いものではあるが、現在のブラインドサッカーには直接繋がっているものではない。

現在、ブラインドサッカーとしてプレーされているＩＢＳＡの国際ルールが日本に移入され

たのは 2001 年である。2001 年 9 月、「視覚障害者文化を育てる会」の設立メンバーを中心とした視察団が、当時アジアで唯一ブラインドサッカーを導入していた韓国に視察に赴いた。その２ヶ月後、大阪での「視覚障害者文化を育てる会」発足式においてブラインドサッカーの体験会「新しい時代へ Kick Off 視覚障害サッカーを楽しもう！」が開催され，70 名を超える参加者があった。（広瀬浩二郎 2004）この日には同時に、2002 年 10 月に正式に発足する日本視覚障害者サッカー協会（ＪＢＦＡ）[3] の前身である「音で蹴るもうひとつのワールドカップ実行委員会」の発足式も行われている。

その後、ブラインドサッカーは全国に普及していく。2003 年 3 月 9 日、東京都の多摩でブラインドサッカーの初めての全国大会である第 1 回日本視覚障害者サッカー選手権が開催された。この大会には全国から 4 チームの参加があった。翌 2004 年の第 2 回大会には 7 チームが参加し、2015 年 7 月の第 14 回大会は、過去最多の 14 チームの参加をえて開催されている。地域リーグ[4] の一つである東日本チャレンジカップがはじまったのも 2004 年である。さらに、この 2004 年には、同年開催のアテネ・パラリンピックにおいて公式競技として採用されるという国際的に大きな動きもあった。

また、日本では当初より弱視者はプレーヤーとして出場が認められていたが、2008 年に開催された第 6 回日本視覚障害者サッカー選手権大会から、晴眼プレーヤーの出場を認める国内ルールが制定されている（岡田仁志 2009）。

3-2　競技のルールと特徴

障害者スポーツの特徴の１つにクラス分類というのがある。たとえば、視覚障害といっても、全く何も見えない状態から普通の文字が読める状態まで、視力は低くないが視野が極端に狭い等の幅がある。スポーツによってはこの違いが結果に影響を与える可能性がある場合がある。そこで、障害者スポーツでは、障害の状態による不公平をなくすために「クラス分類」がなされている。視覚障害者のスポーツでは、「見え」の状態を以下の３つのクラスに分類している

Ｂ１　：　全盲から光覚（光を感じられる）まで
Ｂ２　：　矯正後の診断で、視力 0.03 まで、ないし、視野 5 度まで
Ｂ３　：　矯正後の診断で、視力 0.1 まで、ないし、視野 20 度まで

（日本ブラインドサッカー協会のサイト）

ブラインドサッカーにおいては、このクラスをＢ１クラスとＢ２／３クラスという２つにわけて競技を実施している。Ｂ１クラスはアイマスクを装着し、全盲状態でプレーする。Ｂ２／

３クラスは、弱視者がそのままの状態で行うフットサルである。

前にも示したとおり、本稿ではＢ１クラスを取り上げているので、以下ではＢ１クラスのブラインドサッカーについてみていきたい。基本的には、ブラインドサッカーはフットサルのルールを基盤としている。それにブラインドサッカー独自のルールが追加され、あるいは変更されている。

ここで、本稿の冒頭で描写した場面に沿いながら、ブラインドサッカーという競技のルールや特徴についてみてみたい。

「シャカシャカシャカ」という音の鳴るボールが出てくるが、ブラインドサッカーでは中に鈴が入ったボールを使用している。

「ボイ！ボイ！ボイ！」という声がフィールドプレーヤーから発せられている。ブラインドサッカーでは、ボールを持っているフィールドプレーヤーに近づく際に「ボイ！」という声を発することが義務付けられており、発しないとファールを取られる。著者は、日本ブラインドサッカー協会審判部主催の審判員講習会に参加したことがあるが、その講習会においても、このファールを厳密にとるように指導がなされていた。ただ、審判初心者には「ボイ！」という声を「発した／発しなかった」というタイミングを判断することが難しく、著者は地域リーグで審判（副審）を３試合務めたが、一度もこのファールを取ることができなかった。

そのフィールドプレーヤーが身につけているのは、アイマスクとヘッドギアである。アイマスクについて説明する前に、Ｂ１クラスのフィールドプレーヤーをめぐる議論を紹介しておく。

国際ルールでは、Ｂ１クラスのフィールドプレーヤーは全盲でなければならない。この点に関して 2009 年に出版された岡田仁志著『闇の中の翼たち』（幻冬社）に次のような記述がある。

> 「国際ルールを変えて、すべての視覚障害者にＢ1の門戸を開くべきだ」と考える関係者は多い。ＩＢＳＡがその検討を始めた背景には、競技人口の減少もある。現在、ブラインドサッカーは世界三十五ヶ国で行われているが、各国とも普及は難しい。ＩＢＳＡのカルロス・カンポスは言う。「若い視覚障害者が昔ほど多くはないので、スペインではチーム数が減っています。以前は十五あったクラブが、いまは八つしかありません。新しい選手が増えず、何年も前から同じメンバーで続けているので、高齢化して競技レベルも落ちています」（岡田仁志、2009：227）

このような国際大会における弱視者の参入に関しては、国際大会の参加資格を広げると弱視選手ばかりになり、全盲選手の出番が失われる可能性がある、との意見もあり、さらに、それに対しては、「同じ全盲でも失明の時期によって条件が違うからキリがない」との意見もあるなど、複雑な議論になっている（前掲書：228）。ともあれ、現在のところ、国際ルールでフィールドプレーヤーとして弱視者が出場できるかたちでのルール変更はなされていない。なお、国内ルールでは弱視者の参加は認められており、さらに、前節で見たように、国内のローカル

ルールでは、2008年の第6回日本視覚障害者サッカー選手権大会から１チーム２名までという条件で晴眼者の出場が認められている。しかし、前にクラス分類のところで見たように、全盲といっても義眼から光を感じることができる状態まで、幅が広い。そこで、公平性を担保するために、フィールドプレーヤーは目にアイパッチをはり、その上からアイマスクを装着することが義務付けられている。

フィールドプレーヤー２人のうち１人が装着しているのが、ヘッドギアである。ブラインドサッカーの試合でよくみられるヘッドギアは、硬いスポンジで作られた立方体を環状にしたものを額のあたりに巻き付けるようにして装着するという形態のものである。なお、国際ルールではヘッドギアの装着については義務化されてはいない[(5)]。

ゴールの裏から声を出しているのはコーラーである。コーラーもチームの構成員の一員である。ここで、ブラインドサッカーのチーム構成を見ておきたい。ブラインドサッカーのチームは４人のフィールドプレーヤーにゴールキーパー、監督、コーラー各１名の計７名で編成されている。このうちゴールキーパー、監督、コーラーは弱視者もしくは晴眼者がつとめることになっている。この３者はフィールドプレーヤーに声で指示を出すことができる。では、３者はどのような分担で声をかけるのだろうか。フィールドプレーヤー以外の役割を整理しておく。

ゴールキーパーは、ゴールを守ることはもちろん、ディフェンスのフィールドプレーヤーへガイドすることも大切な役割となっている。ゴールキーパーが動くことのできるゴールキーパーエリアはゴール前の５ｍ×２ｍの長方形の範囲に限られている。監督は、チーム全体を指揮すると同時に、ピッチの中盤でプレーするフィールドプレーヤーをガイドする役割がある。コーラーは、相手側のゴールの裏に立ち、オフェンスのフィールドプレーヤーに対してガイドする。

このように、ブラインドサッカーではピッチをオフェンス、中盤、ディフェンスの３つのエリアにわけ、オフェンスのフィールドプレーヤーに対してはコーラーが、中盤のプレーヤーには監督が、ディフェンスのプレーヤーにはゴールキーパーが声をかけるという規定になっている。もちろん、フィールドプレーヤーは、通常のサッカーあるいはフットサルと同じように、ピッチ内を自由に動くことができる。

フィールドの両端に置かれている壁は、「サイドフェンス」である。ブラインドサッカーの試合時には、サイドラインに沿って１ｍほどの高さのフェンスが並ぶ。これは、スムーズなプレーを促すことに加え、プレーヤーがピッチの大きさを把握するあるいはプレーヤーの安全を守る役割を果たしている[(6)]。

以上、ブラインドサッカーの試合の描写やルールの説明をしてきた。ブラインドサッカーの競技の特徴は、前節で紹介した他の視覚障害者のスポーツと比較すると、第１に、プレーヤーのポジションは一応決められているが、一般のサッカーと同様にどのフィールドプレーヤーもピッチ内を自由に動くことができること、第２に、しかも複数の選手が同時に動くことができ

るのでフィールドプレーヤー間の身体接触が生じる可能性があるということである。

4. ブラインドサッカーの視覚障害プレーヤーへのインタビュー

日本ではブラインドサッカーが全国的に普及し、チーム数も増加してきている。それでもまだ全国に12チームであり、「やりたい」と思っても近くにチームがないこともあるだろう。視覚障害者へのブラインドサッカーの認知も進んでいないということである[(7)]。また、世界的にみても、ブラインドサッカーの競技人口は減少し、その減少を食い止め、増加に転じるためにはどうしたらよいかが模索されている（岡田仁志 2009）。

そこで、第１にプレーヤーからみたブラインドサッカーという競技の魅力とはどのようなものか、第２にブラインドサッカーを普及発展させていくためにはどのような課題があるのか、という問題意識から、ブラインドサッカーのプレーヤーにインタビューすることにした。

インタビューでは、①ブラインドサッカーをはじめたきっかけ、②ブラインドサッカー初体験時の感想、③ブラインドサッカーの魅力、④ブラインドサッカーに関して問題あるいは課題だと感じることという４つの項目を軸に行なった。

インタビュー対象者は、Ａさん（28歳・弱視・ブラインドサッカー暦10年）、Ｂさん（27歳・弱視から全盲へ移行・ブラインドサッカー歴３年）、Ｃさん（19歳・弱視・ブラインドサッカー暦２年）の３名である。インタビュー実施の場所と年月日は、Ａさんは2010年９月４日にＡさんの職場で、Ｂさんは2010年９月11日（水）にＢさんの職場で、Ｃさんは2010年９月18日にＡさんの職場で、それぞれ約１時間30分にわたり行った。

なお、以下のインタビューデータ中の「Ｉ」はインタビュイーの筆者であり、「(　　)」は筆者の補足である。

4-1 自分たちの声で戦略を立てるクリエイティブさが魅力　―　Ａさん

Ａさんは、地元の普通小学校から普通中学校へ進学し、高校の途中で視力が急激に落ちたために盲学校高等部に転入している。Ａさんのスポーツ経験はどのようなものだったのだろうか。

「渡り鳥」のような盲学校の部活

Ａ：小学生のときは、遊びでいろんなスポーツをやってましたが、ちゃんとやってたっていうのは水泳で、スイミングスクールに行ってました。小学校、中学校ぐらいまで水泳をずっとやってました。また、小学校の部活は遊びでソフトボールをしていました。中学校のときは運動部ではなく文化系のクラブでした。高校も、普通校にいたときは、とく

に運動というのはしてなかったんですけど、盲学校に行って、いわゆるその視覚障害関係のいろんなスポーツに出会って、そこではひととおりやったかな、と。盲学校の特性で、1つの部活をずっと通年やるというよりも、季節によって、夏は水泳、冬は陸上、その間に野球をやるとかっていう。部活も渡り鳥みたいな感じのやり方でしたので。そのときは野球をやってました。東京に行ってからもしばらくは野球をやってました。

ここでAさんがいう「野球」とは一般の野球ではなく、前節でみたグランドベースボールである。そのようのスポーツ経験をしてきたAさんのブラインドサッカーとの出会いはどのようなものであったのだろうか。

「日本代表になれるよ」という誘い

A：東京の附属盲学校にいたときは野球をやっていました。ちょうど20歳ぐらいなんですけどね。今からちょうど10年弱前ですね。今、チームでやってるDさんと出会って。Dさんはブラインドサッカーが日本に伝えられたときの初期メンバーというか、結構携わっていらして。そこで、一緒やってみようか、と勧められて始めたような感じです。

では、AさんはDさんからどのように誘われたのだろうか。

A：（Dさんが）一緒にサッカーをやる仲間を探しておられて、「サッカーやらへんか」って。一番印象に残っているのは、（ブラインドサッカーが日本に）伝来というか、来て間がなかったんで、今やったら日本代表になれるよっていうふうに言われて。何かそれは、僕、すごくセンセーショナルに憶えてて。今でこそ、（ブラインドサッカーは）競技人口は少ないながらも100名単位で集まってきてるんですね。当時、やってるのって10人とか。関西でやっとチームができるか、関東でもちょこちょこ始まったかなぐらいの。10何人の中やったらちょっと頑張ったら、当時やったら、世界、まだパラ（パラリンピック）の正式種目にはなってなかったんですけど、アジア選手権とかにも出れるよ、とかっていう話をして。じゃあ、ちょっとやってみようかな。そんなんで始めたような記憶がありますね。

Aさんは、「日本代表」や「アジア選手権」という言葉にひかれたという。しかし、国際ルールでは弱視者の出場は認められていないので、日本代表に選出される資格はAさんにはなかった。このようなかたちでDさんに誘われたAさんは、ブラインドサッカーのイベントに参加することになった。ブラインドサッカー関連のイベントへ初めて参加したときの体験を、Aさんは以下のように語っている。

普通のサッカーとは違う難しさ

Ａ：そのときはまだチームとかもちゃんとできてなくて、ちょうど東京で１チームできるかできひんかぐらいのときやったんです。そのときに講習会みたいな、今でも普及のイベントをやってますけど、あんなのが東京であって、それに一緒に連れてってもらって、実際にルールとかプレーとかをちょっと見してもらったという感じです。

Ｉ：実際に…

Ａ：いきなりやらされましたね。アイマスクを着けさせられて、何かよく分からん間に試合をさせられてびっくりしましたね、あのときは。

このように、いきなりブラインドサッカー体験をすることになったＡさんはどのような感想を持ったのだろうか。

Ａ：正直なとこ、もう何が何か分からなかったですね。１つは、怖いっていう気持ちはもちろんあったんですけど、これはたぶん自分がもともと弱視っていう世界にいるから、アイマスクを掛けてプレーする、野球でもアイマスクを掛けてプレーをしてたんで、それほど怖いっていう感覚というのは、人よりも少なかったんかなと思うんですけど。

Ｉ：なるほど。

Ａ：はい。なので、その抵抗感っていうのはそれほどなかったんですけど、やっぱりこう、何かボールが転がってきてパスを受ける、トラップするとか、まさかドリブルっていうのはもう、全然、普通のサッカーのイメージでドリブルとかしたら、もうボールがなくなって終わるんですね。で、本当に難しいなっていうか、ほんまにこれでゲームが成立するのかなっていう、何かそういうふうな感覚が大きかったですね。難しさですかね。

Ａさんは、まずは「怖い」という気持ちを持ったとのことだが、それは「人よりも少なかったかな」という。それは、これまでの他のスポーツでアイマスクをしていた経験があるからだという。この点については、あとで見るＣさんも、同様のことを語っている。そして、「怖い」気持ちとともに持ったのか「難しい」という感想である。Ａさんは、私の「難しいというのが一番ですか。おもしろさは…」という質問に対して、次のように語っている。

スポーツ自体の楽しみと「仲間とのつながり」の媒体としての魅力

Ａ：ただ難しいだけやったら、たぶんここまでたぶん続いて来なかったと思うんですね。これは僕の感覚なんですけど、サッカー本来のスポーツとしての楽しみっていうこともちろんあるんですけれども、当時そのＤさんも含めて、東京の学校で仲良かった子らと一緒に５人とか６人とかでやってて、サッカーっていう媒体を通じて友達とつながる

っていうんですかね。で、後輩の子とかもちょっと一緒にやろうやとかって言って。僕は、サッカーの本来的なスポーツの楽しみと、仲間と過ごすとか仲間と共有するっていう、楽しみっていうのは、単純に比較はできないんですけど、後者の仲間と一緒に１つのことをやるっていうんですかね。何かそういうふうなところで楽しさがあって。

Ｉ：いまはどうですか。サッカー自体が楽しくない、というわけではなかったんですね。

Ａ：はい、なかったです。やっぱり、難しいからこそやってみたいっていう気持ちもあったし、少しでもやっぱうまくなりたいなっていう思いもあって。できたときの楽しさっていうか、うれしさっていうのは、どのスポーツにもあると思うのですが、ブラインドサッカーにもありました。

Ｉ：今のお話では、初期の頃はどちらかというとサッカーそのものよりも、それを通じていろんな仲間ができていくことが楽しかったというように聞こえますが、いまはいかがですか。

Ａ：その比率はよく分からないですけど、でもそんなに変わってないのかなっていう思いもありますね。ただ、前に比べてやっぱり、多少は（ブラインドサッカーのプレーが）少しはできるようになってくると、よりスポーツとしての魅力っていうのが高まってはきています。だから、昔に比べるとその差っていうのは埋まりつつあって、どっちがどっちって言えないぐらいまではきていると思うんですけども。でも、何かそのチームの中でとかゲームをしててとか、そのゲームが終わった後に相手チームの人と「うまかったやん」とかって話をするとか、一緒にご飯食べるとか。これちょっと話があれなのかもしれないですけど、プレーヤーだけじゃなく、このサッカーの場合はサポーターであるとか、障害を持ってない晴眼のプレーヤーであったりとか、女性のプレーヤーであったりとか、いろんな人がこのサッカーにはかかわれるし、一緒にできるっていう魅力があるんで、何かそういう意味ではその初期に抱いたような仲間づくりっていうか、サッカーを通じて人とつながれるっていう魅力っていうのは衰えてないのかなという気がしますね。

このように、Ａさんはブラインドサッカーにそのスポーツ自体としての楽しみとともに「仲間づくり」の媒体としての魅力を感じている。そのようなＡさんは、スポーツとしてのブラインドサッカーのおもしろさはどこに感じているのだろうか。

クリエイティブにプレーできるのが魅力

Ａ：そうですね、どう言ったらいいかな、今までやってきたスポーツ、野球であるとか、バレーボールであるとか、卓球であるとか、まあ、そんなのもしてきたんですけれども、ブラインドサッカーっていうのは、一番視覚障害者がクリエイティブにというか、自由にプレーできるっていうところに、すごく僕は魅力を感じていて。野球にしても、弱視のプレーヤーの指示で動くとか、バレーボールであっても何か決められた範囲の中でし

か動けないとか、何かそういうふうな制約が付くんですよね。ブラインドサッカーっていうのは、もちろんキーパー、コーラー、監督の指示とかアドバイスはもちろんあるんだけれども、自分たちが自分たちの声で戦略を立ててボールをつないでいく。そういうふうなクリエイティブな楽しさっていうのが１番のブラインドサッカーの魅力かなというふうに感じますね。１番は、そういうふうな自由なサッカー、楽しみ方というか、自由な動きができるっていうのがやはり良さだと僕は感じてます。

このようにＡさんは、これまでＡさんが経験してきた盲人野球やフロアバレーボールとブラインドサッカーを比較し、前者には動く範囲に制約があるが後者は自由に動くことができること、そして、自分たちが主体的に戦略を立ててボールをつないでいくことをクリエイティブという言葉で表現し、それがブラインドサッカーの魅力だと語っている。

4-2 もう少し安全であれば趣味や遊びとしてできるのに　―　Ｂさん

Ｂさんは地域の小学校から中学校へ進んだ。しかし、中学の途中で視力が落ちたため、盲学校に転校したという。Ｂさんは、地域の学校時代にはとくにスポーツを経験した記憶がない、とのことである。そのＢさんがスポーツを経験するのは盲学校に転校してからである。

Ａさんによると、盲学校では生徒数に比して運動部の数が多いために、生徒たちは「渡り鳥」のように運動部を掛け持ちしている。そのような状況の中で、Ｂさんはグランドスフトボールを経験している。では、グランドソフトボール以外のスポーツを経験したことがないというＢさんは、いつ、どのようなかたちでブラインドサッカーと出会ったのであろうか。

こんな危険なスポーツは無理

Ｂさんは、学校でブラインドサッカーのチームに所属していた人といっしょに学んでいた時期があった。その人からブラインドサッカーの練習を観に来ないかと誘われたという。最初にブラインドサッカーと出会った時の感想を以下のように語っている。

Ｂ：それまでブラインドサッカーっていうスポーツあることも全然知らなくて。目が見えないのにサッカーをするっていう発想もなくて。で、ちょっと見に行かしてもらって、それが最初の出合いです。ブラインドサッカーっていうのがあるっていうので見せてもらったり、まあ、たまに暇なときとか、来るかとかって言われて行ったんすけど、あの、正直、やってる姿を見ると怖くて。ぶつかりそうで。ああ、こんな危険なスポーツは無理やと思って。数回見せてもらっただけでしたけど。

Ｉ：えーと、数回見せてもらった、で、このときはもうほぼ光覚もない状態でしたか。
Ｂ：もうないと思いますね。
Ｉ：ですよね。そしたらこのときにＢさんがブラインドサッカーの練習なり試合なり見に行ったときに、その、サッカーをやってる場面は見えないわけですよね。
Ｂ：まあ、音だけです、はい。
Ｉ：それで、これって怖いと思う、そういう判断の基準とかってなんだったんですか。
Ｂ：やっぱり、ボール持って、まあ、自由に走り回るっていう状態ですよね。で、ボイっていう声かけはするにはするけど、基本、それ以外は自由に走り回ってね。それ、今までのグランドソフトとか、フロアバレーとか、ゴールボールとか、そういう私が知っているスポーツはある程度、視覚障害者の動くエリアが決まってたりとかね。それに対して、あれはもう見えん者同士で走りまくるスポーツですんで。実際、誘ってくれた人がちょいちょいケガしてる姿を見てたんで。ああ、これは危険やなっていう感じでした。

Ａさんは、従来の視覚障害者のスポーツと比較して自由に動けることがブラインドサッカーの魅力として語っていた。しかし、Ｂさんがその自由な動きから感じたのは、ブラインドサッカーの楽しさではなく危険さであった。

しかし、その後、Ｂさんはあるチームの一員となる。そのあたりの話をみてみよう。

補欠のいないチーム

Ｂ：最初、正直、チームに入っても補欠やろうし、最初しばらくはベンチにおるやろうし。まあ、そのうちフェードアウトかな、って思ってたんですけど、初練習に行ったらちょうどフィールドプレーヤー4人で。これでうちのチームですっていう感じやって。僕を入れて、きっちりなんですよ。だからもう補欠とかないんですね。

そのような状況の中、Ｂさんは初めて練習に参加することになる。

Ｂ：（初出勤の）前の日ね、初練習の日が。もう、補欠なしという感じで。で、軽くシュート練習とかやってみい、という感じでやって。昔、サッカーをね、見えてる頃にやってた感覚でポーンとボール蹴ったりとかしたらそこそこ蹴れたりするんで、「おお、いけるやないか」と、ぜひ一緒にやろうよみたいな感じで言われて。で、始まりましたね。

こうしてはじまったＢさんのブラインドサッカー生活であるが、Ｂさんはブラインドサッカーそのものに楽しさを感じることはあったのだろうか。

「人間関係」の場としての楽しさ

Ｂ：最初はそういう始まりだったんですけど、僕もＺ市に来て、学生時代にＺ市にいたわけでもないので、人間関係というのが職場しかなくてね。まあ、別に土日も確かに暇やったんで、誘われたら、からだを動かすためにという感じで行っとったんですけど。やってたら、そのうちですね、サッカーっていうよりは、最初はみんなで練習の合間とかにくだらん話したりとか、そのサッカーのメンバーで飲みに行ったりとか。そういう人間関係ができてきたりとか。まあ、そっちが楽しくて、サッカーついでに遊びに行く感じで。そういう形で行くようになりましたね、最初はね。

このように、Ｂさんがブラインドサッカーを始めたのは、スポーツとしてのおもしろさを感じたからではない。Ａさんもブラインドサッカーを媒体とした「仲間づくり」の楽しさを語っていたが、Ｂさんも仲間と集い、飲み、話すことが楽しくてブラインドサッカーを始めている。

では、Ｂさんは、スポーツとしてのブラインドサッカーにおもしろさは感じていないのだろうか。

プレーのおもしろさと怖さ

Ｂ：それでも徐々に何となくルールとかが分かってきて、自分が少し動けるようになったりとかしたら、（ブラインドサッカーが）少しおもしろくなってきて。最初の半年すぎたあたりから少しずつ、熱を入れるようになってきたんです。（Ｂさんが出場した）最初の日本選手権です。始めてまだ１年たたないぐらいのころ、2008年の冬だったかな、その時の試合で、僕、ドリブルもほとんどできなかったので、フォワードに張り付けやったんですね。パスが来たらもうあとゴールに向かって蹴ればいいだけ、という仕事だったんですが、そこでたまたま初ゴールを決めて。そんなんもあって、「よしっ！」っていう感じで少しずつ楽しくなり始めたとこだったんですが…

Ｉ：ですが。

Ｂ：ええ。ですが、ちょうど１年経ったころですね。始めて次の年の春に、やっぱりちょっと慣れてきて動きとかも横暴になってたんかもしれないんですけど。その４月の練習試合で相手の選手と激突して、頭切って。目の上のあたりなんですけどね。で、救急車でそのまま運ばれて４針ぐらい縫ったんです。そこからちょっとまた怖くなってね。始めて半年ぐらいはやっぱり怖いから、なかなか動けなかったんですけど。それをすぎて慣れてくると結構ダッシュして、結構自由に動き回ってたんですけど。それがあってから、またしばらく足が前になかなかいかない時期がありました。

その後、Ｂさんはどうしたのだろうか。

Ｂ：その後は、それで最初はやめようかなって思ったこともあったんですけどね。やっぱり頭やったんで。怖かったですね。一人暮らしやし。このまま、俺、死ぬかなとか。その日の夜なんかは思って。結局、みんなといるのが楽しかったので、まあまあぼちぼちやろうかなっていう感じで。で、またそこからしばらく続けました。何となくですけどね。

このように、Ｂさんを引き止めたのは、ブラインドサッカーそのものの楽しさではなく、それを媒体としてのなかまとの関係であった。そして、Ｂさんはその後もブラインドサッカーを続けることになる。

プレーを「見られること」の楽しさ

Ｂ：その後、しばらくは何となくやってたんで、全然上達もしなかったですし、ドリブルも全然うまくならなかったです。しかし、ある試合があって、まあまあそこそこギャラリーもいて、人に見られながらで。体育館だったんですけどね。そのときの中国の選手のプレーがすごくて。かっこよかったんですね。中国のプレースタイルって、ドリブルで１人で攻め上がってくるタイプなのですが、あんなドリブルができたら突破できるんや､やっぱすごいなと思って。僕もそのときは思っていたよりもけっこう動けたので。で、それを機に、やっぱりみんなに見られながらやるっていうのがね、やっぱり、見られながらうまいことできると楽しいもんだな、と思ったのでドリブル練習しようかというようなことで、はい。

このように、Ｂさんは、他者にプレーを「見られる」ことに楽しみを感じ、ドリブルの練習に取り組んでいったという。

技術が向上することの楽しみと試合の怖さ

Ｂ：ドリブルがちょっとできるようになって、また少し楽しくなったというところはありますね。ただ、まだなかなかそれが試合で生かされてないなと思うし、試合に入るとやっぱり怖いんですよね。練習で、例えばドリシュー（「ドリブルシュート」の略）とかっていうときには、まあ、敵が前にはいないっていうのが分かるんで、ガッって突っ込んでいったりとか。あと練習なんかのときも、相手もある程度加減もするからねえ。こちらの癖とかもある程度知ってるし。お互いセーフティーにいこうとするから、むちゃくちゃなことはしないですが、やっぱり試合になると向こうも必死で突っ走ってくるって

いうのもあって、なかなかその練習でやったことをまだ試合で生かせてないなっていう歯がゆさは正直、あります。

それからしばらくして、Ｂさんはまた練習中にケガに遭遇する。

Ｂ：練習の最後の方やったと思うんですけど、底（「ディフェンス」のこと）の練習をやってたんですよ。で、前にも１人、ディフェンスがいて、Ｅさんがドリブラーやったんです。Ｅさんがぱっと１人かわして、僕はそのＥさんの方に「ボイ」って言いながら行ったんですけど、Ｅさんとぶつかったんです。Ｅさんのひざが私のひざに入って、一瞬、何か靱帯が伸びたみたいな。痛くって杖を借りて歩いて帰ったりとかした。それでも、まあ１週間ぐらいすれば元に戻ってきたんですけどね。しばらくは痛かったりして。結局、ケガが多いんですよね。仕事してるのでケガして休むとやっぱり仕事の方に迷惑かけたりとかするし。もうちょっと安全やったらね、うん、安全にできるんやったら、本当に趣味みたいな感じで、遊びみたいな感じで続けていってもいいのかな、という気はあるんですけど。みんなといると楽しいしね。やっぱりチームとしては強くなりたいという方針もあってね。メンバーもいないし、やっぱり日本選手権で勝ちたいというのもあるし。で、一生懸命強くなっていきたい気持ちもあるけど、やっぱり危険ですよね。頑張れば頑張るほど、ケガの機会も多くなると思うんですね。どこかで本当に大きなケガをせんかなという恐怖があります。（中略）それでもやっぱりいいプレーができて、ね、自分の思い通りにプレーができて楽しい、そういうサッカー自体が楽しめたら、そういうこともしょうがないんやと思える部分あるのかなと思うんですが。（中略）ケガのリスクは常に付きまとうし、だったらもうどっかですぱっと、うん、というのもあるかな、はい。

最後の「どっかですぱっと、うん、というのもあるかな」というのは、ブラインドサッカーをやめるという決断をする可能性がある、ということである。ケガのリスクとブラインドサッカー自体のおもしろさを天秤にかけると、プレーヤーをやめるという選択もあり得るというＢさんは、ブラインドサッカーのおもしろさについては、次のように語っている。

戦略を考えることの楽しさと役割を果たすことの難しさ

Ｂ：もう本当に、最初はサッカーの細かいルールは知らなくって、ゴールに入れるぐらいでね。戦略のこととか全然分からなかったんですけど、練習してドリブルが少し練習できるようになると、例えば、今までだと私なんかはドリブルができなかったので、ほとんどトップに張り付けで、（ボールが）来たらシュートという形だったんです。けど、少しドリブル

ができるようになって、みんなもそれを分かったんで、いろんな戦略があったりとか。こういうふうに壁を使ってパスを通したらこういうふうに攻めることができるとか。そういうのを聞いててね、ああ分かるようになってきた、というか、自分でもそういうことができるようになった、なるかなという感触を何となく持ちだしてから、こういうふうに攻めたらどうやろうなとか、こういう動きができたらどうかなっていろいろ思うようになって、少し楽しくなって。ブラインドサッカーの楽しさが分かるようになってきました。

このように、Ｂさんは、ルールを理解し、技術が上達したことにより戦略ということが視野に入り、それを考えることに楽しさを感じるようになったという。Ｂさんは、ブラインドサッカーのおもしろさに続けて難しさについて、次のように語っている。

Ｂ：自由に動ける、動けるエリアが広い分、さっきもフロアバレーとか野球とかだったらある程度自分の仕事は決められてて、これとこれとこれをやりなさいということが決まってるので、楽なの。そういう部分では分かりやすいんですが、サッカーはもう縦横無尽に動けて、ポジションである程度動くエリアは決めたりはしてますけど、まあ、自分が自由に動くこともあるし、相手も、相手というか仲間ですね。仲間もあちこち自由に動くので、今、仲間がどこにいるのかっていう把握とか、うーん。まあ、あとよく向きが、たまによく分からなくなってたりして、変な方向を向いてドリブルしてたりとか、コーラーの声とかを聞き間違えたりとかして、そんなことしてることもあったり。全体を把握するっていうのは難しいすね。今、試合が流れている中でボールがどこにあって、どっちが持ってるってことをコーラーに教えてもらったりすることはあるんですけどね。例えば、僕だとたいていトップとかにいることが多いので、相手がガーっとハーフラインとか、そういう自陣の方へ攻め入ってるときに、自分がどういうふうに動くのかとか、ただ待ってりゃいいのか、声出して、こっちこっちって言ってりゃいいのか、こっちボールくれって言ってりゃいいのか。まあ、トップなんでね、ゴール前ぐらいまで行かれたら、もうそうするしかしゃあないのかなと思うんですけども、例えばこっちの人間がぱっとボールを奪って攻め上がってきたときにどういう動きをしたらいいのかっていうのが、瞬時にまだ判断が分からないときがあったりしてね。いろんな方向に動けますけど、自由度が高い分。なかなか、そうですね、うまいことその辺がいってないような気がしますね。自由に動けるって言ったってね、ボール持った人間が攻めてゴールまで行くっていうのも、やっぱりポジションがあり、それぞれの役割もそれぞれにあってという中、自由に動きながら、その役割を果たす。また、自分が持った場合には、まあ、分かりやすいんですけど、仲間が持っているときに自分がそこにどういうふうに行くのか

ね。例えば、Ｅさんが(ボールを)持ってたら、自分はＥさんの少し後ろにフォローに入るのか、ゴールのすぐ脇ぐらいのところに行ってパスが出たらすぐにシュートできるように行くのか、その辺の動き方についてとか、前の方だと、ダッと相手が攻めてきたときに、どこまで下がっていいのかとかね。結構、僕、夢中になると、ゴール前から相手の体に引っ付いてハーフラインあたりから自陣の方まで戻ってくることもあるんですけど、フォワードやったらそこまで戻ってくるな、って言われたりもするんで。そこがすごく難しいなと思いますね。

戦略を考えることにブラインドサッカーのおもしろさを感じてきたＢさんは、それに続けて、自由に動くことができる状況の中で「役割を果たす」ことの難しさを語っている。Ｂさんが「難しい」と感じている役割を果たすための動きは、戦略によって変わってくる。どのような戦略を立てるのかということは、ピッチに入っているフィールドプレーヤーの技術レベルによっても変わってくるし、相手側の動きによっても刻々と変化する。さらに、視覚情報が遮断されているためにある程度の不安定な要素がふくまれる[(8)]。Ｂさんがここで感じているゲームでの役割遂行の難しさは、戦略を考える楽しさを支えている一因となっていると思われる。このＢさんの語りと、前に見たようにＡさんが主体的に戦略を立てるおもしろさを「クリエイティブ」と表現しているのは、ブラインドサッカーというスポーツが知的なスポーツであるということである。

このように、ブラインドサッカーのおもしろさも感じているが、同時に、怖さもなかなか薄まらないというＢさんの語りは、今後のブラインドサッカーの普及や発展を考えるにあたって真摯に受け止める必要があるだろう。

4-3 思い通りにならない難しさがおもしろさ　―　Ｃさん

弱視であるＣさんは、小学校４年生の時に１種１級の身体障害者手帳を交付されたという。中学校まで地域の普通中学校に通学していたＣさんは、陸上競技部で砲丸投げの選手として全国大会に出場し、中学２年で５位に入賞、３年の時も９位という経歴を持つ。また、小学校３年生からはじめた柔道では初段を持っていた。高校から陸上競技でスカウトされていたが、弱視が悪化したため、「普通の高校に行ったとしても、その後はまた盲学校に行こうと思っていたので、それが３年早くなったかな、という感じで」盲学校高等部に進学したという。

ブラインドサッカーの方がおもしろい

Ｃ：ブラインドサッカーの前に、いろいろなやつをしてたんですよ。視覚障害者スポーツ。

Ｉ：ふんふん。

Ｃ：最後に知ったのがブラインドサッカーみたいな感じで。

（中略）

Ｉ：それまで、たとえばどういう種目を。

Ｃ：グランドソフトボールもやりました。それも社会人と盲学校で両方やったんですよ。盲学校でやっていておもしろいなと思って、レベルが高いところに行きたいなと思って社会人のところにも行ったんです。あとはゴールボール。バレーボール、フロアバレーもやりましたね。野球というのを知って野球のチームに入ってみたり、ゴールボールはたまたま試合に出ていた時に女子の全日本の監督に声をかけられて、どうやとか言われて。ちょうどそれと同じぐらいに、（よく行っていた）ブラインド・スポーツ・クラブでブラインドサッカーってあるんやって知って、こっちの方がおもしろいって、何かサッカーばっかりやっていたんですけど。

Ｉ：へえ、なるほど。

Ｃ：ひととおり体育でも（いろんなスポーツを）やるので、盲学校って。だから卓球もやるしみたいな。たぶん（スポーツは）たいがいやっていると思いますね。遊びも含めたら。

このように、スポーツが好きで得意なＣさんは、それまで経験してきた視覚障害者のスポーツよりも「こっちの方がおもしろい」とブラインドサッカーを始めることになる。しかし、Ｃさんは弱視である。そのＣさんが全盲のＢ１クラスのブラインドサッカーをすることになったのはどうしてだろうか。

Ｃ：弱視なので、最初はＢ２／３と言う弱視の方の、ロービジョンのブラインドサッカーを見に来たんですよね。当時は、まだ関西でもロービジョンの試合をやっていたので。だけどきつかったんですよね。動体視力がなくて、ボールが飛んできても分からんし。それやったらちょっとアイマスクをする方法もあるよと聞いてから始めたんですよね。（中略）ゴールボールは全員全盲になるからあれなんですけど、野球も最初は弱視でやってたけど、どうにもこうにも（ボールが）分からなくて。でもそれやったら、それでも（試合に）出たいんやったらアイマスクするしかないないぞ、と言われてアイマスクをしてみたら、意外とできるやん、そっちの方がええんちゃうかとなったし。バレーも、全盲と弱視のままするのがあって、弱視の方をやってたけど、体育館やったら転がってくるボールが見えへんしで。それだったら、アイマスクして前におった方が身体能力的にはええんちゃうかとか言われたりで、前におったりして。そういう感覚で慣れたら、全盲でプレーする方が楽になったんですよね。

このように、Ｃさんは Ｂ１クラスでブラインドサッカーをしようと思ったわけではなかった。弱視のＢ２／３クラスでのプレーが難しいということで、Ｂ１クラスでプレーすることになった。視覚の状態は人によりそれぞれである。同じ「弱視」という状態であっても、一般のフットサルのルールで行われているＢ２／３クラスでプレーすることが可能な状態の人もいれば、Ｃさんのように、ボールを視覚的にとらえるのがきわめて困難なためにプレーできない人まで、幅広が広い。このようなプレーヤーが多いことは岡田仁志（2009）も記している。

「からだを動かせる」「思い通りにならない」からおもしろい

Ｃさんは、ブラインドサッカーのおもしろさについて、次のように語っている。

Ｃ：とにかくからだを動かせるというのが一番大きかったんですよね。全然動かせなかったんですよね。野球にしろ、バレーにしろ、ゴールボールにしろ。で、つまんなかったりとか。チームプレーをそれまでやったことないしで、あんまり。それで個人技でもないじゃないですか、バレーとかって。チームプレーで、何かいっしょに動いたりとか、そういうのがすごい苦手で。そういうときにドリブルとか、自分でやっていって、となったら、かっこええなと思っていて。一番難しいな、と思ったんですよ、これまでやった中で。

まず、Ｃさんも、ブラインドサッカーのおもしろさの一番の理由として、「とにかくからだを動かせる」という点を挙げている。Ｃさんがここでいう「動かせる」というのは、腕や脚を動かすことを指しているわけではない。グランドソフトボール、フロアバレーボール、ゴールボールではからだを「全然動かせなかった」と表現していることから理解できるように、ゲームを行うコートあるいはピッチのなかでどこまでを活動範囲として「動く」ことができるかということである。この点については、これまで見てきたように、Ａさんも挙げていたし、日本ブラインドサッカー協会のホームページにおいても、紹介されている。

それまでやってきたスポーツを「つまんなかった」と感じていたＣさんは、ブラインドサッカーに出会ドリブルを経験することをとおして、ブラインドサッカーに対して「かっこええ」ということと「一番難しい」という認識をもつ。

インタビューはこう続いている。

Ｉ：なるほど。
Ｃ：はい。難しいことをしている方がかっこいいかなという勝手な解釈で始めたんですよね。
Ｉ：なるほど。そのブラインドサッカーのむずかしさとは。
Ｃ：思い通りにならないんですよね。こう足でボールをけるにも、トラップするにも、足の

間を抜けていったりとか。バレーとか野球って、そういうのがなくて、人がキャッチできんようなボールがキャッチできたり、人より強いアタックが打てたりとかはするけど、それは簡単、わたしにとってはすごく簡単なことやって、あんまり魅力を感じなかった。余裕やん、みたいな。自分より下の人がいっぱいおって。だけどブラインドサッカーは、ボールを投げられても全然。音は聞こえるし、方向も合っているけど、うまいこと足のところで止まらんとか。そういうのがあって、ちょっと何かむかついたんですよね。

Ｉ：なるほどね。

Ｃ：何か自分ができひんことにむかついたし、こいつはやらなあかんなと思ったという感じなんですよ。

Ｉ：むずかしいからおもしろいと、今も感じているの。

Ｃ：今もむずかしいし、いまもおもしろいですね。

Ｉ：うんうん、なるほど。

Ｃ：奥深いなと思う。1個できたら、また次の課題ができてみたいな感じで、結構難しいですね。こんなにやっても、まだこのレベルかと思ったりとか。

このように、Ｃさんは「思い通りにならない」難しさがブラインドサッカーのおもしろさであるとし、このスポーツを「奥深い」と表現している。

ブラインドサッカーは格闘技

これまで見てきたように、Ｃさんはブラインドサッカーについて「おもしろい」「奥が深い」など、肯定的な語りばかりである。Ａさんは初経験の時は怖さを感じ、Ｂさんは楽しさを感じていても怖さは消えていなかった。Ｃさんは、怖さについてどう感じているのだろうか。

Ｉ：今のブラインドサッカーのルールに対して、もっとこういうところは変えた方がいいのではないか、あるいは不満だとかはないですか。

Ｃ：ないですよね。安全性に関してもそれなりに保証はされているし。ケガをする時はするし。ブラインドサッカーなんかになると、めっちゃ大きいケガになるけど、それも承知の上でやっていたら、そんなに大丈夫ですね。

このように、Ｃさんもブラインドサッカーの危険性に対する認識は持ちながらも「大丈夫」だと認識している。では、このようなＣさんの認識はどこから来るのであろうか。それを考えるためには、ブラインドサッカーに対するＣさんの次のような認識が手がかりになるだろう。

Ｉ：えーと、ブラインドサッカーというのはサッカーなのか、ではないのか。
Ｃ：サッカーとは思うけど、サッカーじゃないんやろうなと。ブライドサッカーは格闘技かなと思ってますもん。あんだけぶち当たって。
Ｉ：ぶち当たりますもんね。
Ｃ：ぶち当たって行きますよね。何か格闘技かなみたいな、こんな時ちょっと柔道やっとってよかったなと思いますね。

Ｃさんからは、一言も「怖い」という言葉は聞くことができなかった。それは、Ｃさんがブラインドサッカーを格闘技だと認識しているからであり、また、同じく格闘技の柔道の体験をもち、相手との身体接触に慣れていることが関係しているようだ。

5. 考察

これまで、３人のブラインドサッカーのプレーヤーの語りを紹介してきたが、ここでは、その語りから明らかになった内容を整理したうえで、最後に、ブラインドサッカーの魅力と今後の課題について考察を試みたい。

5-1 インタビューのまとめ

第１は、ブラインドサッカーのプレーヤーという競技と出会ったきっかけについてである。ＡさんとＢさんは、ブラインドサッカーに直接関わっている知人から声をかけられていた。Ｃさんは、これまでにいろいろなスポーツを経験し、視覚障害者が集まってスポーツを楽しむ組織においてブラインドサッカーについて情報を得て、興味をもった。つまり、個人と組織という違いはあっても、３人とも視覚障害者のスポーツに関係するところからの情報によってブラインドサッカーとの出会ったことがわかった。

第２は、ブラインドサッカーを初体験した時の感想である。Ａさんは「普通のサッカー」とは違う難しさと怖さを感じ、Ｂさんも「こんな危険なスポーツは無理」と危険性を感じていた。ところがＣさんは、怖さは感じずに、これまで経験してきたスポーツと比較して「おもしろいを感じた」という。このように、ブラインドサッカーに最初に体験した時の感想は、「怖い」と感じたＡさん・Ｂさんと「おもしろい」と感じたＣさんとでは、その感覚にかなりの開きがある。その感覚の違いは、ブラインドサッカーの認識の仕方とこれまでのスポーツ体験の違いから生じているようである。つまり、Ｃさんは最初からブラインドサッカーを「格闘技だ」と認識し、また、直接身体接触する柔道の経験をこれまでにしていたことが、「怖い」という感

覚をもたなかった要因と考えられる。

第３は、ブラインドサッカーの魅力についてである。１つ目のブラインドサッカーの魅力は、他の視覚障害者のスポーツと比べて「自由に動くことができる」という点である。この魅力については、日本ブラインドサッカー協会のサイトでも「ピッチの中では自由」として下記のように紹介されている。

> 「ブラインドサッカーは自由をくれるスポーツだ」／ブラインドサッカーについて問われると、選手達は異口同音にそう答えます。これまでの視覚障がい者スポーツでは、視覚障害の度合いが重いほど（視力が弱いほど）、動く範囲を限定し、味方や相手と接触することがないように安全性が配慮されていました。しかし、ブラインドサッカーでは、選手は自分の考えで判断し、ピッチを自由に駆け巡ることができます。ブラインドサッカーは、視覚障がい者が日常では感じることが難しい「動くことの自由とその喜び」を感じる機会を生み出し、彼らが一層の充実感を持った生活を送れることを実現します。

今回の３名の語りをとおして、あらためて「自由に動ける」ことがブラインドサッカーの魅力の１つであることが確認できた。

２つ目の魅力は、「知的なゲームである」という点である。Ａさんの戦略を考えて「クリエイティブに動くことができる」という語りや、Ｂさんの「役割を果たすことの難しさ」という表現に表されている。ただただ自由に動くだけはなく、自由に動くことができる空間でいかなる戦略を立て、実践し、勝利に結びつけるのかが問われる、「知的ゲーム」性がおもしろいと感じさせている。

３つ目の魅力は、「技術の深さ」である。ブラインドサッカーの戦略を支える重要なポイントは個人技である。この個人の技術についてはＣさんが「思い通りにならない」難しさからおもしろさを感じているという。Ａさん、Ｂさんもともに難しい技術が向上したときの楽しさを語っている。このように、技術の難しさ･深さもブラインドサッカーの魅力として語られている。

４つ目は、３人ともに語られていたブラインドサッカーを媒体として構築される「仲間とのつながり」である。Ａさんは、ブラインドサッカーは視覚障害とのつながりだけではなく「サポーターであるとか、障害を持ってない晴眼のプレーヤーであったりとか、女性のプレーヤーであったりとか、いろんな人がこのサッカーにはかかわれる」ので、ブラインドサッカーを始めて10年経っているが、「初期に抱いたような仲間づくりっていうか、サッカーを通じて人とつながれるっていう魅力っていうのは衰えてない」と語り、Ｂさんはケガをしてブラインドサッカーをやめようかと思った時に、「みんなといるのが楽しかったので、まあまあぼちぼちやろうかなっていう感じで」続けることになった。

５つ目は、プレーをみてもらう楽しさである。「見られながらうまいことできると楽しいもんだな」とＢさんは語っていた。

この魅力の３つ目、４つ目、５つ目に関しては、ブラインドサッカー固有のものではなく、他のスポーツのみならず個人技を求められる活動や人が集って行う活動に共通してみられる魅力である。その普遍的な魅力がブラインドサッカーにもあることが、今回のインタビューから確認できた。

5-2 ブラインドサッカーの今後の課題

前述したように、「ブラインドサッカー」としてＩＢＳＡの国際ルールが日本に導入されたのは2001年であり、その歴史は古くはない。近年では日本でもマスメディアでも取り上げられ、注目される視覚障害者のスポーツになってきているものの、その競技人口はなかなか増えてはいないようである。この状況に対して日本ブラインドサッカー協会は、ブラインドサッカーを知らない視覚障害者にその楽しさを知ってもらうことが何よりも重要と考え、盲学校や特別支援学校において講習会の開催し、用具の寄贈も行い、また講師の育成に力を注ぐなど、普及事業を展開している。

しかし、現在のところ、日本ブラインドサッカー協会が本格的に普及活動に取り組み出して日が浅いこともあるが、それが競技人口の飛躍的な増加につながっていない。そこで、今回のインタビューの結果を基にして、ブラインドサッカーの今後の普及発展のために、どのような課題があるのかを考察していきたい。

ブラインドサッカーの競技人口を増やしていくための第１の課題は、ブラインドサッカーの魅力をみんなに伝える「広報活動のあり方」である。今回のインタビューから明らかになったブラインドサッカーの５つの魅力のうち、「自由に動ける」という魅力については、すでに協会が取り上げているものである、しかし、今回のインタビューにおいては「知的なゲームとしてのブラインドサッカー」「奥深い技術をもつブラインドサッカー」という魅力が明らかになった。この点を認識し、アピールしていくことが重要である。つまりそれらをふまえたＰＲを行っていくことがブラインドサッカーの競技人口の拡充に有効であると考える。

第２の課題は、「安全対策の充実」である。インタビューの語りから、ブラインドサッカーをする時にプレーヤーは「怖さ」を感じることが多いこと、そして、「ケガというリスク」を常に孕んでいるということが明らかになった。

ブラインドサッカー日本代表の初代主将である国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎も、その著書『触る門には福来たる　座頭市流フィールドワーカーが行く！』（岩波書店）の中で、「想像してもらえればわかるように、『カラカラ』めがけて全盲者がボールを追うわけだから『怖い』

というのが率直な第一印象だった」と述べている（広瀬浩二郎 2004）。

このようなことを考えると、ブラインドサッカーの競技人口の拡充をはかるためには、その魅力を伝えるだけではなく、より安全にプレーできるような対策を講じることが必要であると言える。

以上のように、ブラインドサッカーの普及発展のためには、広報活動によってブラインドサッカーの魅力を多くの人に伝えていくことと安全対策を充実していくことが課題である。

謝辞

快くインタビューに応じて下さったＡさん、Ｂさん、Ｃさんに深く感謝いたします。

註

（１）全盲および弱視のブラインドサッカーのプレイヤーのことを、本稿では視覚障害プレイヤーと呼ぶ。

（２）ブラインドサッカーの世界的な普及発展については、日本ブラインドサッカー協会のサイトを参照のこと。

なお、長澤らの論文には、「視覚障害者によるサッカーは古くから世界各地で独自のルールのもと、楽しまれてきたと考えられる」との記述があるが、その根拠となる資料は示されていない（長澤由季・入口豊・井上功一・中野尊志、2009）。

（３）日本視覚障害サッカー協会は 2010 年に現在の日本ブラインドサッカー協会に改称されている。

（４）2013 年現在、地域リーグは、関東リーグ、関西リーグ、東北北信越リーグ、九州四国リーグに分けられている（日本ブラインドサッカー協会のサイト）。

（５）現在、日本国内の大会では、ヘッドギアの装着が義務付けられているようである。

（６）以前は専用フェンスが少なく、フェンスの代わりに人がサイドライン上に並んで壁をつくり（「人壁」と呼ばれる）その役割を果たしていることもあった。なお、日本ブラインドサッカー協会では、サイドフェンスのレンタルを行っている（日本ブラインドサッカー協会のサイト）。

（７）ＪＦＢＡの事務局長松崎英吾は、「視覚障害者の方々へのブラインドサッカーの認知度は高いんですか」という質問に対して、次のように述べている。「まだまだですね。現在、年間１試合以上出場する競技者数は 420 人くらいなのですが、そこには視覚障害者も健常者も含まれています。視覚障害者の方に知ってもらうためにはやはり学校教育の中に取り入れられて定期的に行われることなどの取組みが必要です」（サッカーキングのサイト）

（８）試合中にすべてのフィールドプレーヤーがボールを見失い、審判がボールを揺らして音を鳴らし、場所を伝えるという場面が見られる。

文献

広瀬浩二郎、2004『触る門には福来る　座頭市流フィールドワーカーが行く！』岩波書店。
長澤由季・入口豊・井上功一・中野尊志、2009「視覚障害者サッカー（Blind Football）の現状と展望（Ⅰ）」『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門　第57巻　第2号　69 － 82頁
岡田仁志、2009『闇の中の翼たち　ブラインドサッカー日本代表の苦悩』講談社。
鳥飼新市、1994『心のゴールにシュート！　千葉盲学校寄宿舎サッカーチーム「ペガサス」の挑戦』第三文明社。

日本ブラインドサッカー協会のサイト（http://www.b-soccer.jp/ 2015年12月1日取得）
日本ブラインドテニス協会のサイト（http://jbtf.jpn.org/ 2015年11月29日取得）
日本フロアバレーボール連盟のサイト（http://www.jfva.org/fvex.html 2015年11月29日取得）
日本グランドソフトボール連盟のサイト（http://gurasofu.web.fc2.com 2015年11月29日取得）
日本盲人マラソン協会のサイト（http://www.jbma.or.jp 2015年11月29日取得）
日本視覚障害者柔道連盟のサイト（http://judob.or.jp 2015年11月29日取得）
日本視覚障害者卓球連盟のサイト（http://jatvi.web.fc2.com 2015年11月29日取得）
サッカーキングのサイト、2015「世界を変える－ブラインドサッカーで混ざり合う世界へ
（http://www.soccer-king.jp/sk_column/article/301960.html　2015年12月6日取得）
全日本ゴールボール協会のサイト（http://www.jgba.jp/index.html 2015年11月29日取得）

2016年1月13日受理